

「改宗の人類学」序説：マレーシア，オラン・アスリ社会におけるキリスト教化

著者	信田 敏宏
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	62
ページ	151-168
発行年	2006-10-10
URL	http://doi.org/10.15021/00001576

「改宗の人類学」序説 マレーシア、オラン・アスリ社会におけるキリスト教化

信田 敏宏

国立民族学博物館研究戦略センター

はじめに

- | | |
|------------------|-----------------------------|
| 1 オラン・アスリとは？ | 5 ドリアン・タワール村の宗教状況 |
| 2 オラン・アスリのイスラーム化 | 6 あるキリスト者の死 |
| 3 イスラーム化の実態 | 7 オラン・アスリのキリスト教化の歴史 |
| 4 イスラーム化への対応 | 8 キリスト教化とイスラーム化の関係性
おわりに |

はじめに

本稿は、マレーシアの先住民オラン・アスリ社会におけるキリスト教化について考察することを目的とする。本稿の前半部では、1980年代以降に開始されたイスラーム化について簡単に解説する。なぜキリスト教ではなくイスラームについての考察から始めるかという点、オラン・アスリ社会におけるキリスト教化の問題は、イスラーム化の問題を抜きにしては語れないからである。一説には、オラン・アスリに対するイスラーム化政策は、キリスト教宣教師活動に対する対抗意識から実施されたのだとも言われている。

私は、現地調査の過程で、イスラーム化が推進されているにもかかわらず、キリスト教へ改宗する人が増えているという村の新たな状況を観察した(信田 2004b)。この現象をどのように考えればよいのか。それが、本稿における研究課題である。

本稿では、まず、オラン・アスリの概説とオラン・アスリに対するイスラーム化について簡述する。そして次に、調査村における最近の宗教事情について紹介する。最後に、オラン・アスリ社会におけるキリスト教の受容の歴史を概観し、現在のキリスト教改宗問題をイスラーム化のコンテキストのなかで考察する。

オラン・アスリのキリスト教改宗問題については、調査研究途上である。したがって、本稿は、この問題についての「序説」となる。

1 オラン・アスリとは？

オラン・アスリ(Orang Asli)とは、マレーシアのマレー半島部に居住する先住少数民族の総称である。オラン・アスリの範疇に入る18の諸民族は、言語、生業、そして

行政的な慣習によって3つの民族範疇——ネグリト (Negrito), セノイ (Senoi), ムラユ・アスリ (Melayu Asli) ——に分類されている。オラン・アスリとは英語のアボリジニ (Aborigine) のマレー語訳であり、オランとは「人」を意味し、アスリとは「本来の、元来の」を意味する。人口は約10万人。マレーシアの全体人口は約2400万人であるから、オラン・アスリは全体人口の1%にも満たない極少のマイノリティである。オラン・アスリの概説については、拙稿 (信田 2004a) も合わせて参照されたい。

マレーシア政府がオラン・アスリという名称を公称としたのは、1966年のことである。それ以前は、オラン・アスリの人びとは、ビドゥアンダ (Biduanda), ジャクン (Jakun), サカイ (Sakai), アボリジニなどの名称をつけられていた。イギリス植民地時代に彼らに対して用いられたこれらの名称は、現在では蔑称とされている。

マレー人、華人、インド人という3つの主要民族集団で構成されているマレーシア (とりわけマレー半島部) の民族状況において、オラン・アスリはややもすると忘れられがちな存在である。しかしながら、オラン・アスリはその特異な存在ゆえに、学術的関心にとどまらず政治経済的な関心を持たれる存在である。とりわけ、共産ゲリラが武装蜂起した「非常事態宣言期」には、イギリス植民地政府は、その軍事戦略的思惑もあり、オラン・アスリに対して多大な関心を示し、法制度面での整備を実施した。マレーシア政府もイギリス植民地政府のオラン・アスリ政策を引き継いだが、マレー人中心の政府はオラン・アスリ政策の意味内容を次第に変えていくことになった。

オラン・アスリ政策は、オラン・アスリ側の思惑とは関係なく、さまざまな形で実施されている。一見すると気まぐれとも言えるオラン・アスリ政策によって、オラン・アスリの人びとは翻弄されているように見える。あるいは、そうしたオラン・アスリ政策とは関係なくオラン・アスリの人びとは生きているようにも見える。しかしながら、一方通行的なオラン・アスリ政策に対して、オラン・アスリは否が応でもそれに対応しなければならないのである。

オラン・アスリは、従来、狩猟採集や焼畑移動耕作に従事していたが、開発による森林環境の変化、農業開発政策や移住政策、地域の社会経済的な変化などによって、ゴム採液業、紅茶や油ヤシのプランテーションでの労働、日雇い労働、工場労働に従事するなど、生業形態に劇的な変化が起こりつつある。

最近では、環境や生業の変化によるオラン・アスリの貧困化が問題となっている。1993年のセンサスによれば、オラン・アスリ人口の80.8%が「貧困層」として位置づけられ、そのうちの49.9%が「最貧困層」として位置づけられている (Endicott & Dentan 2004: 24-26)。

歴史的に見れば、イギリス植民地期以前は奴隷略奪の対象になり集落は離散し、日本軍占領期には森の奥深い場所での避難生活を余儀なくされ、「非常事態宣言期」には収容所生活を強いられ、現在では政府の再集団化計画の下で開拓地への移住を強いられて

いる。こうした度重なる強制的な移動の経験は経済的な不安を引き起こし、ときとして彼らのアイデンティティや文化的伝統をも奪ってきた。オラン・アスリを研究しているコリン・ニコラスは、このようなオラン・アスリの状況を「文化喪失(de-culturalization)」と指摘している(Nicholas 2000: 111)。

マレーシア政府は、イギリス植民地政府が遺したオラン・アスリに対する保護・隔離政策を統合政策へと転換させた。さらに、イスラーム復興運動が盛んになると、イスラーム化を伴うマレー化としての同化政策を推し進めるようになった。

元来、オラン・アスリは「宗教」を持たぬアニミズム的な信仰を保持する民と見なされ、本稿で紹介するように、イギリス植民地時代にはキリスト教への改宗の対象となっていた。それが現在ではイスラームへの改宗の対象となっている。とりわけ、1980年代以降の政府主導のイスラーム化政策によって、オラン・アスリのムスリム人口は増加傾向にある。しかし、ムスリム・マレー人のなかにはオラン・アスリを「宗教」を持たない民と見なす従来の差別意識が根強く残っており、一方、オラン・アスリ側にもマレー人に対する根強い不信感がある。そのために、イスラーム化を伴うマレー化としての同化政策が成功しているとは言い難い状況となっているのである。

2 オラン・アスリのイスラーム化

次に、オラン・アスリ社会に深刻な事態をもたらしているイスラーム化について考えてみたい。マレーシアでは、1970年代後半以降、世界的なイスラーム復興運動の影響を受けて、イスラーム化が推進されている。マレーシアにおけるイスラーム化の特徴は、さまざまなイスラーム復興運動を政府がイスラーム化政策として取り込み、その結果として国家主導のイスラーム化が推進されている点にある。オラン・アスリのイスラーム化も、宣教のエージェントが国家であるという特徴を持っている。

オラン・アスリに対する国家主導のイスラーム化が強化されるのは、1980年代以降のことである。その証拠に、オラン・アスリの宗教別人口を見てみると、1980年代からのムスリム人口の増加が目立つ。例えば、1980年にはオラン・アスリ人口の5%に過ぎなかったムスリム人口の割合は、1997年には16%に増えている(信田 1999)。現在でもムスリム人口の増加は続いている。

1980年に国立マラヤ大学において、半官半民のイスラーム団体であるPERKIM (Pertubuhan Kebajikan Islam Malaysia: マレーシア・イスラーム福祉協会)の主催による「オラン・アスリ社会に対するイスラーム宣教」についてのセミナーが開催された(PERKIM 1980)。このセミナーは、オラン・アスリに対するイスラーム化政策が発動される契機となった。1983年にはオラン・アスリ局が公式にオラン・アスリに対するイスラーム化政策を表明した(JHEOA 1983)。オラン・アスリのイスラーム化政

策の基本方針はオラン・アスリ局の企画報告書『オラン・アスリのイスラーム化に関する戦略』（JHEOA 1983）のなかに示されている。

報告書では、イスラーム化プログラムの目的として、①オラン・アスリ社会すべてをイスラーム化すること、②オラン・アスリ社会をマレー社会へ統合／同化すること、が挙げられている（JHEOA 1983: 2）。②マレー社会への統合／同化とは、マレー社会への統合から同化への過程でオラン・アスリをイスラーム化するということを意味している（JHEOA 1983: 15）。すなわち、ここでは「マレー社会への同化＝イスラーム化」という等式が成立しているのである。

プログラムのなかでオラン・アスリ社会に重大かつ深刻な影響を与えているのは、「建設的差別」政策である。この政策は、イスラームに改宗したオラン・アスリに対する家屋、経済開発、水道・電気、教育、イスラーム祭礼の援助、その他の社会開発全般にわたっての優遇政策であり、公務員であればイスラームに改宗したオラン・アスリの昇進を優先させるなど、ムスリムのオラン・アスリに対する「逆差別」政策の意味合いをもっている（JHEOA 1983: 13-15; Dentan et al. 1997: 144-145）。逆に言えば、この政策は、非ムスリムのオラン・アスリに対する優遇は後回しにされることを意味しているのである。

ブミブトラ優遇政策が実施されているマレーシアで、マジョリティ民族であるムスリムのマレー人と同様にブミブトラとしての優遇的な地位を認められながらも、マレー人と同等の恩恵を受けられないオラン・アスリの悲惨な現実には、まさに彼らの非ムスリム性に起因している。「ムスリムである」さらには「よりイスラーム的」であることが重要性を増しているマレーシアの政治状況のなかでは（多和田 1997, 2005; 長津 2004）、非ムスリムのオラン・アスリは、イスラーム化しない限り、マレー人と同等の恩恵を受けることができない。上述の報告書はそのことを如実に示しているのである。

1980年代、イスラーム化政策は外部からの批判を恐れて公開されていなかった。しかし、1990年代になると、イスラーム化政策が積極的に公に提唱されるようになった。例えば、1990年には、当時のオラン・アスリ局長官が、「オラン・アスリ社会は、イスラーム化してマレー人の下位集団となることが望ましい」と発言した（Dentan et al. 1997: 80）。世界先住民年の1993年には、265のオラン・アスリの村々にスラウ（*surau*: イスラーム礼拝所）が建設され、イスラーム宣教役人がオラン・アスリの村々へ派遣された。

1990年代後半になると、ジョホール、スランゴール、ヌグリ・スンビランなどの州の宗教局（イスラーム局）が、オラン・アスリに対するイスラーム宣教を公式に発表した。ジョホール州では、1998年に州の宗教局がオラン・アスリ局と協力して「オラン・アスリの社会化」プログラムを実施し、幼稚園児へのイスラーム宣教活動を展開した。スランゴール州の宗教局は、州のオラン・アスリの10%しかイスラームへ改宗していな

いことを問題視し、その原因として他宗教の宣教活動（とくにキリスト教の宣教活動）を挙げた。スグリ・スンビラン州の宗教局は、1999年12月に、イスラームへ改宗したオラン・アスリの小中学生への資金援助を実施し、村々へのイスラーム宣教プログラムの実施を公式発表した。このように、物質的援助や資金援助とイスラーム化の密接な結びつきは、新聞などのメディアで公表され、もはや秘密にすべき事柄ではなくなったのである（以上、Nicholas 2000: 99-100より）。

3 イスラーム化の実態

1980年代から開始されたオラン・アスリのイスラーム化政策に対して、当のオラン・アスリ側の反応はさまざまであった。ムスリム人口の増加に見られるように、イスラームへ改宗していく人びともいた。以下では、オラン・アスリ社会におけるイスラーム改宗の意味について考えたい。

前述したように、最近まで、オラン・アスリ局は自らイスラーム化政策を実施しているとは公には認めていなかった。しかし、オラン・アスリ局が掲げた「建設的差別」政策、すなわち、イスラーム改宗者優遇政策は、オラン・アスリの人びとの間では「常識」となっていた。

「イスラーム教育等を実施する学校教育はイスラーム改宗を目的としている」としばしば指摘される。事実、オラン・アスリ局は「オラン・アスリ子弟をかかえる学校の教師たちは、オラン・アスリを教育することに加えて、イスラーム宣教活動を積極的にすべきである」と報告していた（Dentan et al. 1997: 145-146）。さらに、学校教育を通じて、オラン・アスリ子弟にイスラーム宣教プログラムが実施されている。このような動きは、「オラン・アスリ子弟に対しては親の同意なくしていかなる宗教活動もしてはならない」というイギリス植民地時代に制定されたオラン・アスリ法に抵触するものである。しかし、実態はそう単純ではない。オラン・アスリの統合・同化政策を促進させる装置としての学校教育が歴然として存在しているのである。

フィールドでの見聞では、子供がイスラームへ改宗することを恐れて親が子供を学校に通わせるのを拒否したり、子供が学校に通わなくてもそれを親が容認したりしていた。それだけが原因ではないが、非就学率あるいは退学率は依然として高いままであった。

ブミプトラ政策という名のもとで、マレーシアでは、マレー人を中心としたブミプトラに対する教育面での優遇政策が実施されている。ブミプトラにカテゴリー化されているオラン・アスリの場合にも、高校まではオラン・アスリ局からの援助がある。しかし、大学への進学については、オラン・アスリ局からの援助はほとんどない。なぜなら大学へ進学する場合には、奨学金獲得の段階で「建設的差別」政策というオラン・アスリの

イスラーム改宗者に対する優遇政策が適用されるからである。

このようなシステムのもとでは、奨学金を獲得できない非ムスリムのオラン・アスリ子弟は、たとえ大学に「ブミプトラ枠」が設定されていたとしても、現実には経済的理由で進学を断念することが多くなる。成績が良好な場合でも、イスラームへ改宗しないかぎり奨学金を獲得することが難しいので、多くのオラン・アスリ子弟は進学を断念せざるをえないのである。

こうした状況において、進学を希望するオラン・アスリ子弟のなかには、奨学金を獲得するために、イスラームへの改宗を選択する者も出てきている。進学するにつれて、彼らの周囲に非ムスリムの仲間がいなくなっていくことも改宗の理由の一つのようである。ムスリムではないのにヴェールを被り「マレー人」のふりをする村の娘の写真を見たことがある。マレー人のふりをしなければ、仲間はずれにされるのである。

将来的には、イスラームへ改宗した若者たちはオラン・アスリ社会におけるエリートとなるであろう。オラン・アスリ局などで公務員になっているオラン・アスリの人びともまた、オラン・アスリ社会におけるエリートである。彼らも、昇進や待遇などの面でイスラーム改宗を陰に陽に強いられている。イスラームへの改宗に反発を感じる人は、昇進を断念するか、あるいは公務員を辞めるという選択をしている。しかし、多くの人びとは、イスラームへの改宗を選択している。

こうした教育と公務員の人事システムでのイスラーム化政策は、結果としては、オラン・アスリのエリート層におけるイスラーム改宗者の増加を招いている。そして、次世代のことを考慮すると、このような状況は再生産されると推定できる。

オラン・アスリのイスラーム化は別の次元においても進行している。それが村レベルでのイスラーム改宗者問題である。「建設的差別」政策によって、開発プロジェクトの資金は、イスラーム改宗者に優先的に配分される。ある男性は、彼がイスラームに改宗する意志があるとオラン・アスリ局職員に告げた直後に、家屋建設の援助の対象になったと公言していた。テレビで放映されるイスラーム礼拝を視聴するために必要だということで、イスラーム改宗者にテレビが支給されたという話も聞いた。トレンガヌ州のあるオラン・アスリのイスラーム改宗者たちにはモスクに出かけるのに必要だということでバイクが支給された (Dentan et al. 1997: 144-145)。

村レベルでのイスラーム改宗者たちの改宗動機の多くは、純粹に宗教的なものであるとは言えない。それを示すのは、改宗後の彼らの生活スタイルである。例えば、イスラームで禁忌とされる食物 (豚肉など) を食べたり、断食や礼拝を怠ったりするのは、日常茶飯事である。なかには援助のために与えられた「喜捨」を、酒を飲むのに使ってしまう人もいる。援助金の支給が途絶えたり、イスラームのさまざまな義務に耐えられなくなったりすれば、「イスラームを辞めたい」と言う人もいる。こうしたイスラーム改宗者は、非ムスリムのオラン・アスリやマレー人から、しばしば「名前だけのイスラーム

ム改宗者」と揶揄されている (Dentan et al. 1997: 147)。

4 イスラーム化への対応

イスラームへの改宗が、村の社会秩序に与える影響は甚大である。フィールドでの見聞によれば、バティン (Batin) と呼ばれるリーダーとその周辺の親族のみが改宗しているような村では、バティンらが開発などの恩恵を独占している。一方、権力を持たない周縁の人びとがイスラームへ改宗することで、村の社会秩序に不調和が生じているところもある。また、村の人びとが、ムスリムのグループ、キリスト教徒のグループ、無宗教 (オラン・アスリ局による分類ではアニミズムと呼ばれる) のグループに分裂するなど、イスラーム化が村の社会秩序にもたらす影響には実にさまざまなパターンが見られる。いずれの場合も、現在のところ、イスラーム改宗者は少数派であり、オラン・アスリの多数はイスラームへの改宗を拒否している。

これまでの研究では、イスラーム改宗拒否の理由として、(1) 割礼、(2) 食物、(3) 伝統的信仰の堅持、(4) イスラーム宣教役人のオラン・アスリに対する無理解・不熱心な態度、(5) 「マレー人になること」への拒否、が指摘されている。ここでは、(5) について若干説明を加える。「マレー人になること」への拒否とは、オラン・アスリに対して侮蔑・差別意識を持つマレー人になることへの拒否感覚があるということである。その一方で、「オラン・アスリでなくなること」、すなわち、オラン・アスリ共同体からの離脱に対する拒否感覚があるということも指摘されている。

国家主導のイスラーム化に対するオラン・アスリ側の対応のあり方は、改宗と抵抗という二つの選択肢に大きく分けることができる。改宗の理由は、教育・人事システムのなかで生き残るためであり、開発プロジェクトの恩恵を受けるためである。村レベルでのイスラーム改宗者たちは、オラン・アスリ共同体から「排除」されながらも、生き残るためにイスラームへの改宗を選択する。「名前だけのイスラーム改宗者」と揶揄されながらも、彼らがイスラームへ改宗するのはまさに日々の生活を生きていくために必要な選択だからである。

イスラーム化はオラン・アスリとマレー人との友好関係を目的にしていたにもかかわらず、性急なイスラーム化を強引に進めた結果、逆にマレー人との社会的距離が拡大し、場合によっては緊張関係をもたらすことになったと指摘されている (Mohd Tap 1990: 225)。オラン・アスリ局などの国家セクターへの就職の減少や (イスラーム宣教・改宗が含意されている) 「再集団化計画」という大規模開発プロジェクトに対する非協力的態度あるいは拒否なども指摘されている (Dentan et al. 1997: 150)。前述したように、イスラーム改宗への恐れを主たる原因とした学校教育の拒否という現象も見られる。

5 ドリアン・タワール村の宗教状況

調査地ドリアン・タワール村は、マレーシアのヌグリ・スンビラン州のジェルブ県に位置する。ドリアン・タワール村についての詳細は、拙稿（信田 2004a, 2004b）を参照されたい。

ドリアン・タワール村のイスラーム改宗者たちの多くは、村社会のなかでは、政治的にも経済的にもそして社会的にも周縁的な位置にいる。1997年当時、ドリアン・タワール村の人口は約400人で、その内イスラーム改宗者は約30人ほどであった。

ドリアン・タワール村は1970年代以降の開発によって社会経済的に階層化した（信田 2000）。1970年代初頭の家屋建設プロジェクトに従って居住地を変更し村の丘の上に住むことになった人びとは、ゴム開発などの開発プロジェクトを積極的に受容し、経済力をつけていった。彼らは「上の人びと」とされ、村の上層を形成することになった。その一方で、家屋建設プロジェクトを受け入れず移住を拒んだ人びとは丘の下の居住地に留まり、その他の開発プロジェクトをも拒否し続けた。彼らは「下の人びと」とされ、村の下層を形成することになったのである。

しかしながら、こうした開発によって構築された村の階層秩序は、1990年代後半のイスラーム化のインパクトを受けて再編成されることとなった。つまり、「下の人びと」を中心にイスラーム改宗者が増加することになったのである。彼らのほとんどは、元来のオラン・アスリ、すなわち「森の民」であって、これまで政府による経済開発や学校教育に対して拒否の姿勢を示してきた人びとであった。しかし、開発や森林伐採による森林産物の減少や森の環境の変化などの原因で、「森の民」としての生活をすることが困難になっていた。そうした環境の変化に適応できずにいた彼らは、貧困状態に陥っていた。好むと好まざるにかかわらず、イスラームへの改宗というのは、そうした彼らが生き残るための選択肢の一つとなっていった。

その一方で、ドリアン・タワール村では、「建設的差別」政策下でも、ムスリムになることなく、生業を転換し、新しい環境に適応しようとしている人びともいる。「上の人びと」である。開発を受容し、村の上層を形成する彼らからみれば、生き残るためとはいえ、イスラーム改宗という手段をとってさまざまな恩恵を受けようとする貧困層の人びとの行為は、「裏切り」に値する。つまり、「下の人びと」のイスラーム改宗はもっぱら経済的理由によるものであり、宗教的理由からではないため、非難の対象となっているのである。こうして、イスラーム改宗者たちは、非ムスリムを核とするオラン・アスリの社会的ネットワークから切り離されていった。

私は、2001年3月にドリアン・タワール村を再訪した。以来、毎年のように村を訪問しているのだが、そのなかで最も目を引く顕著な変化は、キリスト教改宗者の増加という現象である。その後の継続調査の過程で、キリスト教改宗者の増加という現象は、

ドリアン・タワール村に限定されないということも分かってきた。

1980年代、ドリアン・タワール村では、キリスト教へ改宗する人びとがいた。オラン・アスリ局は、オラン・アスリ社会にキリスト教が広がるのを快く思っていなかった。当時オラン・アスリ局と良好な関係にあったバティンもまた、キリスト教改宗者に対して反感を抱いていた。したがって、キリスト教へ改宗した人びとは親族を頼って他村へ移住していったのである。

ドリアン・タワール村の特徴は、イスラームやキリスト教への改宗者が、主として「下の人びと」の間に分布していることである。すなわち、村の貧困層の間で改宗現象が起きているのである。このことは、改宗が、経済的な理由を大きな要因とするものであることを示している。

6 あるキリスト者の死

2003年8月、村に滞在していたとき、いくつかの出来事があった。その一つがキリスト教改宗者の死である。彼の名前はコタウで私と同年代であるが、軽い精神病を患っていた。といっても、病院に行くというわけではなく、調子が悪いと「狂気 (*gila*)」の状態になり、そうでない普通の状態の時もあった。かつて、彼は婚約までこぎつけたことがあるのだが、相手側に彼の「病気」が知られ、結婚が破談になったことがある。そのとき、彼は泣き止んだという。

彼は村の一部の人とともにキリスト教へ改宗していた。改宗の理由は、伝え聞くところによれば、少しでも精神の病が良くなるためであったという。軽い「狂気」の状態になった彼が、農作業をするでもなく、暗い家のなかで床にぼんやりと座っていた情景を、私は今でも鮮明に憶えている。

ドリアンの季節を迎え、現金収入が増したとき、しばしば、「狂気の人 (*orang gila*)」と言われている人が行方不明になることがある。以前に、「狂気の人」アジャムが、ドリアンを売却した現金を持ってバスを乗り継ぎ、クアラ・ルンプールまで行ってしまっ、街を徘徊しているところを警察に保護されたことがあった。

コタウもたびたび行方不明になっていた。しかし、ドリアン季節における今回の行方不明の場合、結末は悲劇に終わった。コタウは、バイク(字の読み書きができないので、免許を持っていない)に乗って、スレンバンまで出かけたが、バイクのガソリンがなくなり、バイクをどこかに置きっぱなしにして、スレンバンの町を徘徊しているところを警察に保護されたのだという。

警察からの知らせを受けた親族に連れられて、村に帰ってきた彼は、何を思ったのか、ペットボトルに入れてあった農薬を一気に飲み干してしまったという。彼が村の人に語ったところによれば、「神さま(キリスト教の?)が彼に農薬を飲むように指示し

たから、飲んだのだ」という。そのときの彼はもちろん正気ではなかった。

オラン・アスリ社会をはじめとするマレーシアの貧困層の人びとの間では、農薬を飲んで自殺する人が多い。自分は農薬を飲んでも死なないぞ、と言って子供たちが農薬を遊びで飲んで死んでしまう事故も、村で実際に起きている。コタウの双子の弟は、今では笑い話になっているけれども、石鹸を食べてしまったという。

コタウの場合、狂気の状態で農薬を飲んだのだが、農薬を飲んだ後、彼は正気に戻り、自分がとんでもないことをしたことに気がついた。しかし、すでに手おくれであった。病院に行き、治療を受けたが、飲んだ農薬の量が多すぎたため、しばらくして、苦しみながら死んでいったという。

コタウの死が普通の人の死と異なるのは、彼がキリスト者であったことである。つまり、ドリアン・タワール村でのキリスト教改宗者の死は、彼が最初であった。キリスト教改宗者の墓場をめぐることは、2002年3月に村で話し合いが持たれ、村の墓場とは別に新たに墓場を設けることとされていた。

ムスリムの人々が亡くなった場合には、村の墓場ではなく、近隣のマレー村の墓場に埋葬されることになっていた。しかし、これも時と場合による。村のイスラーム改宗者の人がコタウに先立って亡くなっていたが、彼の親族によって村の墓場に埋葬された。村のアダット・リーダーは死者がムスリムならばイスラームの墓場に埋葬すべきだと再三警告したが、結局、村の墓場に埋葬してしまった。「あとで掘り起こされるかもしれない」と村の人びとは語っている。実際に、そうした問題はたびたび起こっていた。また、脳卒中で死んでしまった他村のイスラーム改宗者の女性は近くのマレー村の墓場に埋葬された。彼女の親族たちは、遠巻きに埋葬の様子を見守るだけであった。

コタウの遺体は、村の墓場の近くのゴム園のなかに埋葬された。この地域が今後は村のキリスト教改宗者の墓場となっていくのである。

さらに、あるテレビ番組で、オラン・アスリの墓場の問題が話題になっていた。「イスラーム教徒の墓場にキリスト教徒の墓が混ざっているのは問題だ」と報告されていた。よくよく調べてみると、イスラーム教徒の墓と思われたその墓は、非ムスリムのオラン・アスリの墓であった。オラン・アスリの墓は墓の道具（墓石や墓標など）をマレー人から購入するので、ムスリム・マレー人の墓とほとんど変わらない場合もある。その村では、キリスト教徒も村の墓場に埋葬されていたのである。こうしたテレビ番組が放送される背景には、オラン・アスリの村でキリスト教徒が増加していることに対するイスラームの側の過剰とも言える反応がある。

ドリアン・タワール村のように、キリスト教改宗者の墓場を別に設けているのは例外であり、ほとんどのオラン・アスリの村では両者は区別されずに混在している。しかし、イスラーム教徒だけは別なのである。

以上、現在の村レベルにおけるキリスト教事情について、村でのエピソードを交えて

述べてきた。キリスト教改宗者の増加は、イスラーム改宗者の増加と平行する形で進行しているようだが、イスラームと同様にキリスト教に関する問題も、マレーシアにおける政治的事情から、詳しいデータを把握するのは困難である。

オラン・アスリに対するキリスト教化は、現在になって起こった現象ではない。マレー半島では、マラカがポルトガルに占領されて以来、キリスト教化は脈々と続いている現象である。以下では、オラン・アスリに対するキリスト教化の歴史について簡単に触れておきたい。

7 オラン・アスリのキリスト教化の歴史

オラン・アスリのキリスト教化の歴史は、イギリスの植民地時代の19世紀半ばにまでさかのぼることができる。現在、マレー半島北部のペラ州周辺ではプロテスタント系（メソヂスト派）が、マラカ州周辺ではカトリック系のキリスト教徒が多い。

16世紀にマラカがポルトガルに占領されたときにはカトリックが入り、17世紀にオランダが占領するとプロテスタントが入ってきた。ただし、いずれも教会活動は植民者を対象としたものであって、オラン・アスリに対する宣教活動はイギリスの本格的な植民地化が進む19世紀半ば以降となる。

ペラ州に多く居住しているスマイのメソヂスト派に関する論考を執筆したシャストゥリ（Shastri 1989: 68-69）によれば、イギリスによる植民地化のなかで、オラン・アスリに対して最初の宣教活動を実施したのは、英国国教会ではなく、マラカ周辺で活動していたフランスのカトリック系のミッションであった。1815年以来、マラカにはロンドン宣教協会（LMS: The London Missionary Society）の支庁があったが、オラン・アスリに対する宣教活動はほとんど実施せず、もっぱら中国へ派遣する宣教師のトレーニングや聖書のマレー語訳を行っていた。

1847年にボリエ（Borie）神父というフランス人が、マラカ周辺のオラン・アスリに対して最初の宣教活動を実施した。ちなみに、ボリエ神父と同じミッションに所属するファヴル（Favre）司祭も宣教活動を実施し、オラン・アスリに関する記録を残している（Favre 1848）。

ボリエ神父は、オラン・アスリに対する宣教の拠点として、マラカ近郊のアイル・サラッ（Ayer Salak）に約1,000エーカーの土地を得た。アイル・サラッでの宣教活動は、度重なるマラリアのため、1871年引退を余儀なくされた（Shastri 1989: 68）。アイル・サラッに住んでいたオラン・アスリの人びと（Orang Mantraと呼ばれていたが）は、その後、ヌグリ・スンビラン州のラブ（Labu）やルクット（Lukut）に移住した（Hunt et al. 1992: 13）。1900年には、カテッソン（Catesson）神父がラブのオラン・アスリ集落を訪れ、簡易な教会を建設した。1946年には「学校」がつくられ、1954年には正

式に教会が建設された (Maureen 2000: 93-94)。

マラカ周辺 (スグリ・スンビラン州も含む) のオラン・アスリ集落のキリスト教徒がカトリック系であるのは、以上の理由による。ただし、オラン・アスリに対する最初の宣教活動から現在までの歴史を扱ったまとまった文献資料はない。

それに対して、ペラ州のオラン・アスリ集落を対象としたメソディスト派の宣教活動については、いくつかまとまった文献資料がある。問題はイスラーム化が強化されている最近の状況なのだが、それについては報告がない。以下では、シャストゥリの論考 (Shastri 1989: 70-82) を引用しながら、簡単にメソディスト派によるオラン・アスリに対するキリスト教宣教の歴史を見ておきたい。

1884年、メソディスト派は、インドを經由してシンガポール (当時はイギリスの海峡植民地) に入ってきた (その主体は、The Methodist Missionary Society of New York)。そのなかでもドイツ系のミッションがオラン・アスリに関心を抱いたようである。

その後、1927年にアメリカ人のミーンズ (Means) 夫妻がスマトラのメダン (The Board of Missions of the American Methodist Episcopal Church in Medan, Sumatra) を拠点にしてバタックを中心に宣教活動を実施した。それがスマイというオラン・アスリの1グループに対する宣教活動の契機となった。

イギリス植民地時代のキリスト教側の報告を読むと、マレー人 (スルタン) に遠慮して、キリスト教宣教活動を積極的に行なわなかったようである。つまり、オラン・アスリはスルタンの保護下にあるので、やたらと介入をしてはいけないという方針があったのだ。イギリス植民地政府も、間接統治を実施し、スルタンの保護下にある臣民の「宗教」と「慣習」に対する不干渉の立場をとっていたことにも関係している。

ちなみに、イギリスの人類学者ヌーン (H. D. Noone) は、メソディスト派の宣教活動に対して批判的であった (Noone 1936: 58; Hasan 1994: 149)。なぜなら、キリスト教へ改宗することによって、オラン・アスリの伝統的な文化が喪失してしまうと彼は考えていたからである。しかし、スラウェシのトラジャを訪問して以降、彼はその批判を撤回した。なぜなら、トラジャの状況を見て、キリスト教に改宗したとしても伝統文化は喪失しないということを確認したからである。

スマイに対するキリスト教宣教活動は、インドネシアからの移民にまぎれてやってきたバタック出身の宣教師によって実施された。その結果、キリスト教改宗者が増えていった。1932年、「サカイ・プログラム」と名づけられた宣教プログラムが、ペラ州のキャメロン・ハイランドで実施された。しかし、こうした宣教活動も日本軍の侵攻によって中断を余儀なくされた (Hunt et al. 1992: 170)。

1931年には、教会組織が改編され、インド系や華人系による宣教活動が中心となっていた。この政治的背景は不明であるが、不干渉の立場とキリスト教改宗者の増加の結

果、キリスト教の土着化が生じたと考えてよいであろう。欧米系の宣教師たちが、マレー半島に入りにくくなったことも関係していた。

マレーシア独立以降の宣教方針は、イスラームを国家宗教とするマレーシア政府に遠慮しながら宣教活動を実施するというものであった。ローカルの宣教エージェントによる宣教活動が中心となり、結果的にキリスト教の土着化が進行した。1968年にはマレーシアのメソヂスト教会は、アメリカの教会組織から独立することになった。

マレーシア全体という脈絡では、1963年にマレーシア政府は、外国人のカトリック司祭、プロテスタント牧師、その他のキリスト教宣教関係者について10年間の期限付きで活動を許可するという政策を採用した（寺田 2002: 17）。以来、外国人によるキリスト教宣教は制限され、マレーシア国籍の教職者（華人、インド人、オラン・アスリなど）によって宣教活動が展開された。したがって、上述した1968年のアメリカのメソヂスト教会組織からの独立もやむを得ない措置であったことが分かる。

オラン・アスリに対するキリスト教宣教活動はマレーシア独立後も続行したが、次第に宣教活動に対する圧力が強まるようになった。1982年、オラン・アスリ局はパハン州で活動していたスマイの宣教師たちを「政府の許可なく宗教活動をした」としてパハン州から追放した（Dentan 1997: 125）。さらに、1990年には、スランゴール州政府は、オラン・アスリ集落に建設された「教会」を違法建築物として破壊した（Loh 1993: 61-63; Dentan 1997: 125-126）。この事件を報じた『アジアウィーク (*Asiaweek*)』誌は、マレーシアでは発行禁止となった（Loh 1993: 67）。これらの出来事が、オラン・アスリに対するイスラーム化が推進され始めた時期と重なっていたことは注目に値する。

8 キリスト教化とイスラーム化の関係性

以上、オラン・アスリに対するキリスト教化の歴史について分かりうる範囲で簡単に述べてきた。ここでは、オラン・アスリに対するキリスト教化とイスラーム化の関係性について考察したい。

考察を進める上で、二つの疑問を提示しよう。一つは、なぜ現在キリスト教改宗者が増加しているのかということ。もう一つは、その裏返しであるが、なぜこれまでキリスト教へ改宗する人びとが少なかったのかということである。

2番目の問いへの答えとしては、マレーシアにおいては、特にオラン・アスリ社会では、イスラーム側の牽制によって、キリスト教宣教活動が著しく制限を受けていたことが考えられる。マレーシアのマレー半島部におけるキリスト教宣教活動は、イギリス植民地時代以来一貫してその活動に制限が加えられていたのである。これには、キリスト教宣教側のイスラームに対する配慮があった。

イギリスの植民地統治下ではなく、マレー人中心のマレーシア政府が政権を握っている現在の脈絡では、キリスト教宣教活動を排除したうえで、統合・同化政策の一環としてオラン・アスリをイスラーム化するというマレーシア政府の戦略が見え始めている。事実、イスラーム化政策が開始されると、キリスト教宣教活動に対する圧力が強まっていった。

外部からの介入を排除し、政府の思惑に沿った政策を実施していくというこのやり方は、オラン・アスリに対するNGO活動を制限する政府側の措置にも表れている。「彼らを保護する責任はオラン・アスリ局にあり、オラン・アスリ局はその役割を十分に果たしている。ゆえに、外国からのNGOは不要である」という論理である。国外向けには「先住民の保護」を名目として援助を拒みながら、実際には保護政策ではなく、イスラーム化しようとしたり、貧困を野放し状態にしたりするなどの、いわば国内植民地化を推し進めているのである。

このような状況を念頭に置いた上で、1番目の問い、すなわち、なぜキリスト教へ改宗する人びとが増えているのかということを考えてみたい。まず指摘できるのは、イスラーム化が強まった結果、キリスト教への改宗を選択する者が出てきたということである。イスラーム化の圧力にさらされたオラン・アスリのなかには、イスラームへの改宗を回避するために、キリスト教やバハイ教（Baha'i）などの他の宗教へ改宗する動きがあると指摘されている（Endicott 2003: 157）。また、イスラーム以外の宣教活動を認めていないにもかかわらず、1984年までに少なくとも1,500人ほどのオラン・アスリがキリスト教に改宗したという報告もある（Dentan et al. 1997: 149）。これらの現象は、強制的なイスラーム化への対抗策として、オラン・アスリの人びとがキリスト教などの他宗教への改宗を選択していることを示している。

イスラーム化やキリスト教化という脈絡のなかで、忘れるべきでないのは、大半のオラン・アスリの人びとは、イスラーム化しているわけでもなく、キリスト教化しているわけでもないということである。彼らは、むしろ「オラン・アスリ化」している。すなわち、今日のオラン・アスリ社会では、自らのアイデンティティについて盛んに語られ、先住民運動のなかでオラン・アスリとしての文化的アイデンティティを希求するような動きが顕著に見られるということである。

次に、このオラン・アスリ化の動きと関連づけて、イスラーム化やキリスト教化について考えてみたい。まず、イスラーム化というのはマレーシアの脈絡ではマジョリティ民族であるマレー人への同化を意味する。これはオラン・アスリ化とは大きく異なるベクトルである。イスラーム化、マレー化によって、彼らのオラン・アスリとしてのアイデンティティは大きく揺さぶられることになる。ゆえに、こうした脈絡のなかでイスラーム化への抵抗という現象が表出していると言えよう。

一方、キリスト教化は、イスラーム化に比べて、オラン・アスリ化を妨げるものでは

ない。スマイのキリスト教改宗問題とアイデンティティについて論じたロウは、イスラーム化は実質的にはマレー化を意味し、スマイとしてのアイデンティティを放棄することになるが、それとは対照的にキリスト教へ改宗したとしてもスマイとしてのアイデンティティは保持されると指摘している (Loh 1993: 307)。

宣教のエージェントの観点から考察を加えてみると、イスラーム化では宣教師はマレー人役人であり、国家が大きく関与していると言えるのに対して、キリスト教の場合には、宣教師はオラン・アスリや華人などの民間人で、しかも国外のキリスト教団体とも関係のある人びとである。グローバル化が進むにつれて、イスラームへ改宗するよりも、外部に開かれたキリスト教へ改宗する方が有利であるとの考え方もあるようである。敵意を抱いているマレー人が信仰するイスラームよりもキリスト教は良質だと考えている人びともいる (Loh 1993: 308)。国家 (マレー人) とオラン・アスリの決して友好的とは言えない関係がここにも影を落としているのである。

おわりに

世界的なイスラーム復興に端を発したマレーシアのイスラーム復興運動は、オラン・アスリというマレーシアの周縁世界に生きている人びとの生活世界にまで及び、彼らの生活環境や社会のあり方を変えようとしているというのが、ここでの大きな枠組みである。彼らオラン・アスリの世界はもはや外部と隔絶した世界ではありえず、グローバルな状況のなかに否応なく巻き込まれていく世界へと変貌をとげつつある。

このような状況のなかで、イスラーム化への対応の一つとして、改宗を拒否するという対応のあり方があり、私は、それを「イスラーム化への抵抗」の問題として議論してきた。こうした視点はもちろん重要であるが、継続調査の過程のなかで、キリスト教改宗者の増加という現象も見逃してはいけないと考えるようになったのである。

イスラーム化へ抵抗する人びとの間でも、イスラーム宣教に比べて、キリスト教宣教活動については、肯定的に考える人びとは多い。彼らが言うには、イスラーム宣教師に比べて、キリスト教宣教師 (華人が多い) は信頼できる人物が多いとのことである。

さらに印象的なことは、イスラームを批判すれば国内治安維持法 (ISA: Internal Security Act) によって逮捕される可能性があるという村の人びとが認識するようになったことである。過剰とも言えるこうした反応の背景には、絶えず、政府の役人などに警告を与えられたり、ニュースなどでイスラームの状況 (テロリズムや急進的イスラームへの取締り) を見ているからではないかと考えられる。反イスラーム的な動きがこのような形で牽制されることによって、結果的には、彼らの反イスラーム感情は萎縮してしまったのである。

イスラームやキリスト教に関連した議論のなかで、村の人びとが私に対して次のよう

な問いを発していた。それは、「生きていくうえで宗教（イスラームやキリスト教）は本当に必要なのか？」という問いである。これは、「無宗教者」というレッテルを貼られ、絶えずイスラームやキリスト教などの宗教に取り囲まれ、改宗を促されるという状況に置かれている彼らにある種の迷いが生じていることを示している。生きる上で宗教が本当に必要なのかという問いはあまりにも重く、私にはこの問いに対する明確な回答がまだ用意できていない。

ただし、イスラーム化やキリスト教化によって、いわゆる世界宗教に囲まれるという環境のなかで生きることになったオラン・アスリの人びとが、自らの位置性を考えるようになってきていることは、考察に値することである。

このような問題系に対する一つの手がかりは、先住少数民族の改宗に関する歴史的あるいは同時代的な研究であろう。オラン・アスリというこれまでいわゆる伝統的な信仰をしていた人びとがイスラーム化やキリスト教化にさらされているという事態を考えると、人類学的な視点に立てば、現代は世界宗教が拡大する最終局面にあるのではないかと思わずにはいられない。おそらく、これはマレーシアのマイノリティの社会に限ったことではないはずである。こうした世界的な現象を何らかの比較の方法を用いることによって、改宗過程や要因、そして改宗現象は現代世界においてどのように位置づけることができるのかということまで探究する必要があると感じている。おそらく、こうした「ローカルな場で起きているグローバルな拡がりを持つ現象」を解明するには、人類学的な研究方法が最も適当である。むしろ、人類学者しかこのような問題に関心をもたないかもしれない。本稿のタイトルを「改宗の人類学」序説としたのは、こうした理由による。本稿は、こうした問題系に対する序説となるであろう。

謝 辞

本稿は、第165回民博研究懇談会（2003年12月3日、於：国立民族学博物館）及び2003年度国立民族学博物館共同研究「キリスト教と『文明化』の人類学的研究」（研究代表者：杉本良男国立民族学博物館教授）研究会（2004年1月24日、於：国立民族学博物館）において報告した内容に加筆・修正を施したものである。研究会参加者の方々からは、有益なコメントをいただいた。ここに記して深謝いたします。

文 献

Dentan, Robert Knox

1997 “The Persistence of Received Truth: How the Malaysian Ruling Class Constructs the Orang Asli.” In *Indigenous Peoples and the State: Politics, Land, and Ethnicity in the*

- Malayan Peninsula and Borneo*, Winzeler, R. L. (ed.), pp. 98-134. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies.
- Dentan, R. K., Endicott, K., Gomes, A. G., and Hooker, M. B.
1997 *Malaysia and the Original Peoples: A Case Study of the Impact of Development on Indigenous Peoples*. Boston: Allyn and Bacon.
- Endicott, Kirk
2003 “Indigenous Rights Issues in Malaysia.” In *At the Risk of Being Heard: Identity, Indigenous Rights, and Postcolonial States*, Dean, Bartholomew and Jerome M. Levi (eds.), pp. 142-164. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Endicott, Kirk and Robert Knox Dentan
2004 “Into the Mainstream or Into the Backwater? Malaysian Assimilation of Orang Asli.” In *Civilizing the Margins: Southeast Asian Government Policies for the Development of Minorities*, Duncan, Christopher R. (ed.), pp. 24-55. Ithaca: Cornell University Press.
- Favre, P.
1848 “An Account of the Wild Tribes Inhabiting the Malayan Peninsula, Sumatra and a Few Neighboring Islands.” *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* 2: 237-282.
- Hasan Mat Nor
1994 “Christianity and the Peripheral Community: A Malaysian Case.” *The Journal of Sophia Asian Studies* (上智アジア学) 12: 143-158.
- Hunt, Robert, Lee Kam Hing and John Roxborough (eds.)
1992 *Christianity in Malaysia: A Denominational History*. Selangor, Malaysia: Pelanduk Publications.
- Loh Kee Wey
1993 *Evolving Semai Identities: Religious Conversion and Social Relations in a Semai Community*. M. A. Thesis, Monash University.
- Maureen K. C. Chew, IJ
2000 *The Journey of the Catholic Church in Malaysia 1511-1996*. Kuala Lumpur: Catholic Research Centre.
- Mohd. Tap Salleh
1990 *An Examination of Development Planning among the Rural Orang Asli of West Malaysia*. Unpublished Ph. D. Dissertation, University of Bath.
- 長津一史
2004 「『正しい』宗教をめぐるポリティクス——マレーシア・サバ州、海サマ人社会における公的イスラームの経験」『文化人類学』69 (1):45-69.
- Nicholas, Colin
2000 *The Orang Asli and the Contest for Resources: Indigenous Politics, Development and Identity in Peninsular Malaysia*. Kuala Lumpur: IWGIA/COAC.
- 信田敏宏
1999 「改宗と抵抗——マレーシアのオラン・アスリ社会におけるイスラーム化をめぐる一考察」『東南アジア研究』37 (2): 257-296.

- 2000 『『上の人々』と『下の人々』——オラン・アスリ社会における開発と階層化』『社会人類学年報』26: 129-156.
- 2004a 『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。
- 2004b 「ドリアン・タワール村の生活世界——マレーシア，オラン・アスリ社会における階層秩序と世帯状況」『国立民族学博物館研究報告』29 (2): 201-306.
- Noone, H. D.
1936 “Report on the Settlements and Welfare of the Ple-Temiar Senoi of the Perak-Kelantan Watershed.” *Journal of the Federated Malay States Museums* 19 (1): 1-85.
- Shastri, Hermen P.
1989 Christ in Tribal Culture: A Study of the Interaction Between Christianity and Semai Society of Peninsular Malaysia in the Context of the History of the Methodist Mission(1930-1983). Submitted in Partial Fulfilment of the Requirement for the Degree of Doctor of Theology, The Faculty of Theology, Ruprecht-Karis-Universitat of Heidelberg.
- 多和田裕司
1997 「イスラームという力——マレー・ムスリム社会における文化的理念への指向」『岩波講座 文化人類学第6巻 紛争と運動』青木保ほか（編），259-281ページ所収，東京：岩波書店。
2005 『マレー・イスラームの人類学』京都：ナカニシヤ出版。
- 寺田勇文（編）
2002 『東南アジアのキリスト教』東京：めこん。

資 料

- Jabatan Hal Ehwal Orang Asli (JHEOA)
1983 *Strategi Perkembangan Ugama Islam di Kalangan Masyarakat Orang Asli*.
- Pertubuhan Kebajikan Islam Malaysia (PERKIM)
1980 *Resolusi: Seminar Dakwah Islamiah di Kalangan Orang Asli Malaysia*. Universiti Malaya, Kuala Lumpur.